
勇者は魔王で人間で？

ハルジオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者は魔王で人間で？

【Nコード】

N9277Y

【作者名】

ハルジオン

【あらすじ】

一人の少年が学園に足を踏み入れる。それは本当はよくある『普通』の出来事のはずだった。だが、その少年は『普通』ではなかった。むしろ『普通』になれなかった。何故なら（血の繋がらない）魔神の子供にして（なりゆきで）魔王、しかも（偶然に）勇者だったのだから。

全ては未だ世に無く

「……なんと、汚らわしい」

『それ』を見た男は顔をしかめた。

「このような……このようなものが、我がディアヴール家の血を引く者とは」

冷えた部屋。

石を積んで作られた部屋を照らすのは赤い炎の松明。

男は、足元に平伏す女に視線を向けた。

その顔は赤く、怒りに満ち溢れている。

女は額を床にこすりつけかねないほど深く頭を下げていた。

「誠に申し訳ございません！」

女は、不自然なほど青白い顔をしていた。

体調が悪いのだと考えるのは当たり前だったが、男はそんな事を気にもしなかった。

そして女も、気にしないではいられない様子だった。

「当然だ。よりによって、銀だと？ 我がディアヴール家は代々金の髪と金の目、金冠の魔神様の恩寵を受けし柱の一つだぞ……。」

なのに銀？ 銀眼だと？ たとえ髪は魔神様に近い印である黄金だったとはいえ、銀は許されん」

「申し訳ございません！」

ずる、と額をこすりつける音。

血が出たのではないかと疑われるような音だった。しかし女の声は悲痛だった。

男は台を見る。

石畳の部屋の床に、黒い色でえかがれた緻密な陣が敷かれていた。ちょうど北の方角に、金色の石が置かれている。

その中央には白い台。

乗せられていたのは布に包まれた赤ん坊だった。

生後一ヶ月も無いのではないかというほどに小さく、肌も血に塗れている。

「このままでは我がディアヴール家は、ロウフェン家に魔神様の側に侍る権を握られたままではないか！ この売女が、悪魔の血を引く女が、家名に泥を塗りおつて！」

「申し訳ございません……申し訳ございません!!」

「グイネア家とはいえ許されんぞ！ 恥を知れ！」

男はそう言うってから、女を罵倒する言葉を荒々しく吐き散らす。

女は自分が、通常では考えられないような罵倒の言葉を受けても、『自分が悪い』という様子を崩さなかつた。

言われて当然、報いは受けるべき、という様子。

男は台に向けて手を差し出した。

「『溢れる水、走れ光。 我は金冠の魔神、煌月の恩寵受けし血を引く者』」

黒い陣、その模様を構成する直線、曲線、文字から青白い水が染み出す。

じわりと、だが陣を乱さない水は、陣の内側にのみ薄く満ちる。

「『此処に水鏡。 それは月を映す貴き鏡。 それは異なる場への

扉
」

水は青白く、発光。
黒い陣は金色の光に染まった。

「『此処に代償を。 代償は咎の肉、咎の骨。 いずれも捧げた代償』」

布 赤ん坊が、赤ん坊の右目が光る。
男の額に汗が滲んだ。
差し出した手が震える。

「『 今、扉は開いた』」

身体のありとあらゆる毛穴が開いた。

同時に鳥肌が立つ。
これは畏れた。

今から途方も無い、通常では見る事が出来ない奇跡が始まる。

そして陣の中から湿気た濃い緑の香り。
それは何処か獣臭く。

「『対象と代償は同列。 何を欠いても、同じ。 ただ運べ、運べ
運びたまえ！』」

光は、一瞬強く輝いた。
陣の中が見えないほどの強い光。
女は目を閉じる。

光が収まるのを瞼の裏に見て、女は目を開く。

「……ふん」

滴る汗を袖で拭いながら男は息を吐く。

男の荒い息が部屋に響く。

陣は光を放ってはいない。

最初とほぼ同じ状態。

だが、陣の中に台と金色の石はあったが、その上に乗っていた布と赤ん坊の姿は無かった。

まるで、最初からそこに居なかったかのように。

魔神は照れない

「素敵でございますわあ！」

黒いワンピースと白いエプロンを纏った女が、歡喜の声をあげた。

そこは陰鬱さとは無縁の、真っ白な部屋だった。

鏡のように磨きあげられた床と壁。

敷かれた絨毯は赤く毛も深く、調度品は一流の手によるものに見えた。

「坊ちやま、素敵でございますのっ！」

胸の前で自分の手を絡ませ、頬を赤らめる。

そんな女は小麦色の肌に鮮やかな赤い髪と藍色の目をしていた。

「坊ちやまをこんなにも素敵に仕上げる事が出来て……私も本懐を遂げ、非常に嬉しく思いますわあ……それと同時に自分の腕を誇りに思います」

「……ただ、ちょっと髪を梳かしただけじゃないか」

目尻に涙を浮かべしみじみと語る女に、少年は軽く頭を掻いた。

少年の少し長めの金色の髪が、瞼の上にかかる。

「どつちにしたって、眼の色は変えるし……」

「それでもございます。私は、坊ちやまの容姿に磨きをかける事が生きがいなのでございます。つまり、坊ちやまがたとえ突然女になられたとしても、突然人間をお辞めになられたとしても、坊ちやまの容姿に磨きをかけますわ」

「そうじゃなくて……」

少年は自分の姿を見下ろす。

白いシャツに黒い衿、紺のズボン。

衿から通すネクタイは黒く、シャツの胸の辺りに剣と杖、そして盾を組み合わせた紋がある。

どれも新しく作ったものばかりに見えた。

少年の首には、金で作られた月のペンダントがある。

月は金、だが鎖は白。

少年の髪の色に合わせたかのような白だった。

「この名札」

少年が示したのは衿に付けられた青い名札。

流暢な薄い黄色の文字で少年の名前が記されている。

「俺、確か黒が良いって言ったはずなんだけど……」

名札の色は五色ある。

青に黄字の名札、緑に白字の名札、黒に白字の名札、白に黒字の名札、金に黒字の名札。

少年は黒に白字の名札を望んだはずだったが。

「私の独断により、青に変更しました」

「なんでさ!？」

「何故なら坊ちやまは、黒より青と黄　　いいえ金がよくお似合いだからでございます。　月の金と夜と青……」

胸を張って女は言う。

「本当は金に黒字がよろしかったのですが、断られてしまいました」

「そりゃそうだろ……金五家しか使えない名札だから」

「それはとても不自然な事ですわ」

「自然じゃないか？」

納得がいかないように女は顔をしかめる。

「坊ちやま、坊ちやまは自分の立場を本当に理解されていますの？
坊ちやまは金五家よりとても優れたお方、もつと金を身に付ける
べきお方です。もつと自分に誇りをお持ちくださいませ」
「持つてるよ、勿論、ちゃんとき。でも凄いのは俺じゃなくて母
上で……」

「坊ちやま」

真剣な眼で女は少年を見る。

そのあまりの真剣さに、少年は息を呑む。
今までとは放つ空気が全く違う……。

「母上ではなく、父上でございます」

その発言に、やや少年は沈黙。
そして。

「……え？ もう父上？」

少年の不思議そうな発言と共に、扉が開いた。
誰かの手によってではなく、勝手に。

「そう、今は父上だ」

豊かな低音がそこに響く。

そこに居たのは、絶世と言えるほどの美貌だった。

肌は陶器のように白く、肩まで伸びた波打つような髪はまるで満月
のような金色、目も全く同じ色に輝く。

汚れもすぐに目立ちそうな真っ白な衣服はまるでローブを重ねたか
のように床を引きずるほど裾が長い。

少女が憧れる絶世の美を持つ騎士や王子とはまた違う たとえば
支配者のような気配を持つ美貌の男だった。

その美だけで十分に権威の象徴。

誰もが跪ずき許しを乞うかのような。

男は少年を見るとゆるやかに口許を緩ませる。
……麗しい。

「やあ……息子。少しぶりだねえ」
腕を広げ素足のまま少年に近寄る。
素足だが、足音は一切しない。

エプロン姿の女は恭しく頭を下げると、道を譲るように退く。

「二日ぶり……父上」
少年はやや緊張したように答える。

「うん？ そうか、まだ二日か……」
男は少年のすぐ側に立つ。

少年の頭は、男の肩程度しかなかったため男は少年を見下ろす。

「背が、伸びたか？」
「まだ最後に会って二日しか経ってないのに、背が伸びるわけ、ない」

「む、そうか。昔は二日でこれほどは伸びたものだが」
『こんなに』と手で示したのは、幾ら成長期でも有り得ない幅だった。

「食べ過ぎで太っても、二日でそうはならないから」
「……難しいな」
大袈裟に男は考える。

「しかしたったの二日とは……、「俺」も無理をしたものだな。

何故かは考えずともよく分かるが」

「じゃあ、何故？」

「それは勿論……」

男は少年の顎に指を這わせる。

吐息すら聞こえそうな位置で囁きかけた。

「この父上である【俺】が息子の晴れ姿を見られぬなど……おかしな話だろうか？」

「でも母上は最初届いた時に見てるから、父上も見た事になるんじゃないか……」

「我が眼で、直接見る事こそが最も意味があるだろう。違うか？」

もつと顔が近くなる。

唇が触れそうな距離だ。

溜息が出るくらいに、美しい。

「【父】と【母】は違う生き物だろう。ならば【父】と【母】はそれぞれ見なければなるまいよ。それとも、我が息子は【父】は嫌か？」

「そんな、父上を嫌いなはずが無いだろ!？」

「ならば父に見せよ、じっくりと髪の一筋一筋から足の爪先までをな」

ようやく顔を離した。

だが男は、言葉通りに少年を嘗めるように眺める。

「……ふむ、此処はやはり親として子に何か言うべきなのだろう。」

「……………」

わざとらしく大袈裟に自分の顎に手を当て、口を開く。

「虐められた時は、【俺】の名を告げるがいい」

自信があるように男は笑う。

その笑み。

普通の人間……でなくても、たとえ同性でも、見惚れてしまうほどのもの。

「父上の名前は言ってもあんまり効果が……」

「……【俺】の名を告げても効果無いだと？」
有り得ない事を聞いたとばかりに眉が上がる。

「いや、そうじゃなくても言っても信じないよ。普通の人間は父上

に会った事が無いし、普通の人間は相手が凄い人間じゃないかぎり父上を知っているだなんて思わないし……」

「分かん。お前はその『凄い人間』だろう」

「俺が金五家ならそうだって。でも俺は普通の人間として行くから、そう思わない」

「……人間は面倒だ」

それ以上、何かを考えるのを止めたらしい。

その少し悩んだような、憂いたような表情ですら麗しいとは最早異常。

異常な美。

異常美とでも言うべきか。

いいや敢えて異常美「ストレンジ・ビューティ」と言うか。

なんでもいいだろう。

とにかくこの美。

少年が今から行く場所にコレを越えるようなものは、一切無い。無いはずだ。

ちなみに目の前のこの男に並ぶ美貌の持ち主は、今までに五人しか

見た事が無い。
いずれも麗しい存在だ。
性格は別として。

「……とにかくだ」
ポンと長くしなやかな指を少年の肩にかける。

「お前はこの【俺】の育てた息子。 お前の名誉は【俺】のもの、
【俺】の名誉はお前のもの。 故にお前の名誉を貶る輩が居ようものなら【俺】の名を出しても構わぬ、何なら呼ぶが良いぞ、お前には許そう」
言葉は何処までも傲慢。
しかしそんな口調には確かに優しさはあり、愛情もあった。
こんな言い回ししかしないような人物なのだから仕方ない……のか
もしれない。

「うん。 ありがとう、父さん。 俺、父さんに育てられて良かったよ」
少年は確かにその愛情を受け取っていた。
嬉しそうにはみかみながら言う。

「何を当然の事を。 お前の親はこの《俺》だ。 金冠の魔神たるこの《俺》の」
口調とは裏腹に少し照れたらしい。
腕を組み、少年に背を向ける。

「ちゃんと連絡するよ」
「当然だ。 でなければ、そちらに行くからな」
少年に背を向けたまま。
でもやはり少し嬉しそうに。

少女は笑む

少しの沈黙。

居心地の悪さでも感じたか男はやや人間くさく、わざとらしい咳払いをする。

「ところで」

言葉の勢いはやや強い。

まるで話題を変えようとしているかのように。

「アレが、今にも飛び出しそうになっているぞ」

少年や女の居ない方向を見る。

そちらには何も無く、ただ白い壁があるだけ。

それだけのはずだった。

「構わぬ、来い」

そんな命令するかのような口振りに呼応するかのように空間が揺れた。

まるで水面に石を投げ入れたかのよう。

ありとあらゆる常識を無視して空間は揺れる。

その空間からするりと、浮かび上がるように少女が現れた。

背中まである真っ直ぐな金の髪を一部だけ短く二つに、黒いリボンで結んで睫毛も眉も金。

肌はとても白く、頬と唇は薄紅。

こちらはこちらで、非常に可愛らしい少女だった。

纏うのは黒い衿に赤いタイ、プリーツスカートはギリギリ膝が見える長さ。

それは少年の服によく似ている。

ゆっくりと目を開く。

目の色は臙脂。

まず男を見て、深く優雅に一礼。

「魔神様、本日もお目にかかれて光栄でございます」

「ああ」

わりとどうでもいい、そんな口調。

「貴方の目と耳をお汚しする事を、この私にお許しくございますか？」

「好きにしる」

ほとんど少女を見ない。

だが少女はうれしそうに微笑む。

視線を少年へ。

より一層うれしそうに微笑み、

「レイヴン様あ！」

勢いよく駆け寄り、抱き着いた。

少年の首に腕を回しぎゅっと抱きしめる。

見た目より軽い少女は、少年を誤って押し倒す事は無い。

「ああっ、この感触……このぬくもり、匂い、肌触り、全てが懐かしく感じますわー！」

少年の胸に顔を擦り寄せる。

うれしそうに頬を赤らめてさえ居た。

「私……わたくし ザイーシャは、レイヴン様にお会いする時を今か今かと、眠りも浅くお待ちし」

「昨日も会ったよね」

「私には季節が一巡りするよりもずっと長く感じましたわ!」

少女は ザイーシャは頬を擦り寄せるのをやめない。

まるでそれが至福だと言わんばかりに。

「今はレイヴン様の全てをこの網膜と肌と鼓膜に焼き付けていたいです……ああっレイヴン様あ」

うっとり。

ザイーシャは止まらない。

「今日から、レイヴン様の今まで見た事の無い一面が見られるのですね……。走るレイヴン様、汗を流すレイヴン様、勉学するレイヴン様、他の方とお話するレイヴン様、食事するレイヴン様……ああ……なんて素敵なのでしょう……」

「それ全部今まで見た事あるよね?」

「うふふ、『学校』は初めてですわよ。シチュエーションは初めてです。ならば私は、レイヴン様の全てを記憶しますわ……魔神様にも認められた婚約者として!」

『婚約者』。

その単語に少年 レイヴンは反応した。

正確には『魔神様にも認められた』。

「ちよつ、と、父上!?!」

「なんだ」

そこでザイーシャはようやくレイヴンから離れた。レイヴンが喋りやすいようにか。むしる魔神の視界を妨げないように、か。

ザイーシャよりも魔神は遥かに上の存在で、ザイーシャは尊敬以上の熱を持っている。

存在を感じるだけで嬉しそうにする。

魔神から話し掛けられた時などとても凄い。

これはザイーシャに限らず、ザイーシャの親戚全員そうなのだが。もはや本能だ。

だからレイヴンに向ける愛情と魔神への敬意は全く違う。天秤にかけると本能により後者の方が優先されるのだ。

「認めたってどういう事だよ!」
レイヴンの記憶では。

今までこの(養)父である魔神はザイーシャが婚約者である事を認めていなかった……気がする。
だからこそ色々と一線を守れたのに。

「……今まで【俺】が認めなかった理由は分かるか?」
しかしレイヴンの望んだ事とは違う事を男は言った。
ちらりと流し目でレイヴンを見る。

「え? それは……別に俺がザイーシャの事を、」

「違う。……親としては、息子の将来を心配するものだろう?」

「……?」
言っている意味が分からない。

「今まで認めなかったのは、これがお前の将来を導ける器ではなか

「つたからだ」

「……器？」

「失念していたのだ。 ああ、この【俺】がな……珍しい事だ。 お前の婚約者に相応しいのは、どんな時でもお前を導ける者。 たとえ夜の褥でもな」

……褥。

つまりベッドで……夜という事は……。

「……えっと、それはザイーシャが吸血鬼だから夜は元気とかの間違いじゃ……」

吸血鬼だから夜は超元気とか。アレ的な意味じゃなく元気で、アレ的な意味じゃなく寝られなくなるからとか。

「この【俺】が失念していたのだ。 夜の経験は、紅辺りが何かしているのではないかと思っただが……そんな事は無かったようだな。

そんな折にこれはやり方を会得したのだ。 人間の夫婦とは、まずこちらが大事なのだろう？」

「……」

レイヴンは無言でザイーシャを見る。

ザイーシャは。

「私……レイヴン様に悦んでいただけるよう、精一杯努力します」
などと言って頬を赤らめた。

その意味する事は。

「ち、父上！ 俺の意見は！？」

一番大切なのは双方の意見……のはず。

「お前はこれが嫌いか？」
「好きだけど……いや、コレは父上が思っているような種類じゃなくて！ 普通にだよ普通に！」
「普通とはなんだ？ 普通の愛があるのか？」
「純粹に不思議そうだった。」
父に常識は通じない。

「……とにかく！ 俺は別に……ザイーシャの事を愛してたりするわけじゃないんだってば！」
言うてから、心配になった。
レイヴンはどうあれザイーシャはレイヴンを愛している……おそろく。

「……とにかく！ 俺は別に……ザイーシャの事を愛してたりするわけじゃないんだってば！」
言うてから、心配になった。
レイヴンはどうあれザイーシャはレイヴンを愛している……おそろく。

「レイヴン様が、私を心配なさって……！」
何故か感極まっている。
目を潤ませてレイヴンを見つめていた。

「……構いませんわ。私は吸血鬼、レイヴン様は人間。人間の寿命は短く、故に様々な事に目は向くのは自然の事。なので、レイヴン様が私を見て下さるまで待ちますわ、何百年でも。たとえばレイヴン様が人間の女を好きになっても、私はレイヴン様を愛しますもの、ええそうですとも」
えらく自信があるようだった。
この様子では本気だろう。

とにかくショックを受けていないようでレイヴンは安心した。

「……で、父上」

「申し訳ありませんが」
気を取り直して男を見る。

が、今までずっと黙っていた女が口を開いた。

「お二方、そろそろお時間でございます」

女の手には時を知らせるもの。

それが示す時間は確かに時間ギリギリ。
今すぐ此処を出なければ、少し危うい。

「続きはまた今度言う」

「うむ、【俺】の時間は無限だからな。許そう」
鷹揚に頷く。

「行こう、ザイーシャ」

「はい、レイヴン様。地の底までもお付き合いしますわ!」

「……まだ行かないから!」

沈黙は、行く可能性があったから。

二人は走り出す。

男が現れた扉に向かい、ふとレイヴンは振り向く。

男は黙ってレイヴンを見ていた。

それに向かってレイヴンは笑いかける。

「行ってきます、父さん」

「ああ」

霧の小路に人は立つ

この白い屋敷を囲むのは『開かずの森』。
常に霧が立ち込め静かなこの森は、樹齢百となるような木が生い茂り中には千年もの時を刻んだ木もある。
そこに朝日が照らす様子は幻想的な光景で、つい筆を取りたくなるほどののだが、人の気配はほとんど無い。

何故ならそこは『開かずの森』。
普段はあるはずなのに誰も気付かず、間違って入れれば方向感覚を失いなかなか外に出られない。
稀に方向感覚はしつかりしていたとしても森に住まう飢えた魔物や獣に襲われてしまう。
だからこそ『開かずの森』だ。
近隣の住民も滅多に近寄らない。

だが、実際はそんな事は無い。
方向感覚が狂うという事は無い。
ただ『戻りたくなる』だけだ。
そこに入った途端、ふと何かの用事や思い込みが入り、足を進ませる事無く終わる。

それは中にあるものを隠すための術。
だがどんな魔法使いも、誰もそれに気付かない。
その術者は、たとえ一流の魔法使いよりも遥かに上の存在なのだから。

さて。

そんな開かずの森が守るのはあの白い屋敷。

夢か何かかと思うほど、汚れの無い無垢なる白。

全てが眩しいくらいの白に塗れたそれは、しかし優雅な佇まいだった。

そこに何があるのか。

基本的には誰も知らない。

そもそも屋敷の存在を知っている者は少なく、中でも人間は一人のみ。

その人間はレイヴンと名乗る少年だった。

レイヴンは人間だ。

間違いなく。

だが開かずの森に捨てられていた。

まともな人間は近寄れない場所なのだから、魔法で運ばれたのだから。

この森には飢えたモノが多い。

赤ん坊が　ましてや無力な人間が　そこに居ようものなら、すぐに食われて死ぬはずだった。

ただ運が良いのか悪いのか。

レイヴンは拾われてしまった。

それも相手は人間ではなく、この世のありとあらゆる生物の頂点に居るような存在、魔神に。

魔神より上の存在が居るとすればそれは神話のみに存在する神か。人間が魔法と呼ぶそれらは全て世界に七つある魔神により所有され、配下の精霊達はその魔法の力を貸し与えられている。

そこから更に人間が、『契約』もしくは『借用』で行使。つまりほとんどの人間が魔法を扱う際は魔神との間に精霊を挟み、精霊を挟む以上は力が低下するのは当たり前。人間の中には直接魔神から魔法を借りる者も居るが、そんなものは稀でどれも同じ血を引く。

そういった人間達を、それぞれの魔神の色彩に例えて、たとえば金冠の魔神なら金五家、黒天の魔神なら黒三家と呼ぶ。

しかし彼らも全員が全員魔神の顔を把握していないし、ましてや魔神全員を知っているというのは有り得ない。

今までの歴史を紐解いてみれば、そんな人間は片手で足りるほど。

レイヴンは、それくらいに希少価値がある人間の一人だった、一応。

「私はいつも、非常に悩んでいるのです……」

ザイーシャは悩ましげに呟く。

何処までも白い廊下。

革靴で歩くとコツコツと響く。

ついでにゴロゴロと車輪の音。

生活感は無く、誰とも擦れ違ふ事が無い屋敷。

「私は時と空間を統べる金冠の魔神様に仕えるラ・ルルーシユ家。

……レイヴン様一人を運ぶくらいは容易なのです。世界の裏側

にだって可能なのです」

「知ってるよ」

「出来る事なら私が！ 運びたかったのですが……」

目の前にある扉を見て、悲しげに。

「……魔神様がお作りになられたものを無視する事は……ああ……

……」

とつても悩ましげ。

レイヴンはちらりとザイーシャを見て、慰めるように話し掛ける。

「向こうに着いた後は、帰る時もザイーシャの力を借りるから。頼りにしてるよ」

「まあ！」

ぱあつと花が咲いたような笑顔。

「そんな、頼りにしているだなんて……うふふ照れますわ、興奮しますわあ……」

「……。うん、じゃあ行こうか」

純白の扉を開ける。

見た目に反し重さは全く感じさせない。

部屋の中は広いが、調度品は無い。

ただ床に、金色に光る陣が敷かれていた。

魔神によって設置された、半永久発動の移動陣。

望めば何処へでも行ける。

しかし二人が立って入れる分の大きさしかない。

「……こんな大きな荷物で、大丈夫か？」

手にした荷物を見る。

レイヴンにしるザイーシャにしる、家出を越えた量の荷物を持っている。

ザイーシャなどよくも一人で持てたと感心するほどの量だ。

「やっぱり向こうで買い揃えた方が……」

「まあ。私、いくらなんでもレイヴン様関係

「行こう」

「はい」

二人並んで陣へ。

二人が足を踏み入れた瞬間、陣は一際大きく輝いた。

視界は全て金色の光に染まる。

まるで宙に浮いているかのような感覚。

あまり慣れたものじゃない。

だが流石は魔法の大元の魔神。他に比べれば遥かに安定している。

目を閉じる。

瞼の裏にも金色の光。

だがやがて、色彩が変化した。

無風だったはずが、頬に風が当たる。

まるで狭い道を吹き抜けるかのような風。

自分の呼吸と胸の音しか聞こえなかったはずなのに、人の喧騒が聞こえる。

とても賑やかな声。そして行き交う足音。

目を開けると、そこは街の路地だった。

大きな道から分かれた、建物と建物の間に来た小さな道。

二人はそこに立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9277y/>

勇者は魔王で人間で？

2011年12月1日00時52分発行